

〔農作概況〕

水 稲

本年は植付前より天明以来の異常天候で凶冷年の再来が心配され、北日本では苗代期の異常低温による苗の生育障害をはじめとして7月の低温は、その第2波ともいうべきもので九州でも分けつ盛期にあたり雨が多く、生育は軟弱となり株張りは不良のところが多かった。しかし、7月下旬から8月一ぱい日照に恵まれたため、生育は強健となり有効茎歩合が高まって、単位面積当りの穂数は栽植株数の増加ならびに短稈穂数型品種であるホウヨク系統の急速な普及などの技術面の進歩によつて、平年より相当多く確保された。

それに加え、幼穂伸長期の気象的好条件によつて穂の小さい品種の増加にもかかわらず、1穂の着粒数も平年以上となつたので、m²当り穂数は平年より約1割近くも増加するという状況であつた。

低温の第3波は、9月の出穂期直前よりはじまり10月一ぱい続いたので、出穂・開花・受精・登熟などは平年より著しくおくれ、成熟期は11月はじめから中旬になり、刈取期の天候も悪かつたので平坦肥沃地帯では月末近くまで立毛のまま収納されないものがあつて、収穫期は2週間程おくれた。

なお、山間の高冷地では冷害による不稔が発生して、局地的には大減収を来したが、平坦部では台風の影響も他地域にくらべて少なく、低温はむしろ稲の生理面では呼吸による消耗を少なくし、白葉枯病などの病害の進展をおさえる結果ともなつて、成熟期まで茎葉が健全で活力がみられ、昭和32年の低温年次に見られたような秋まきり型の登熟を示し、収量は九州全体の平均で10a当り400kgを突破する史上最高の豊作となり、とくに佐賀は県平均512kgの収量を記録して全国第1位にのしあがるといふ九州の稲作にとつて最良の年であつた。

早期栽培では苗代期間ならびに植付初期が低温であつたので生育はおくれたが、日照は多かつたため健全な生育で穂数も多く、出穂後も主産地帯である南部九州では梅雨明けも比較的早く登熟期間は好天候に恵まれたため、宮崎では例年多発するいもち病の発生が少なく、収穫期も順調に進み、近年稀な豊作となつたが、鹿児島では台風15号および黄萎病の被害があつて、作柄は平年作を下回つた。

陸 稲

早期栽培では発芽ならびに初期生育は良好で、5月の多照で草丈の伸長、分けつ発生も良好となり、穂数は増加した。干害もほとんどなく出穂期より登熟前期は多照に経過したが、台風15号のため籾ずれ倒伏を生じ、稔実は不良となり、作柄は平年並程度にとどまつた。

普通栽培では春収納のおくれて播種期がおくれ、梅雨も長かつたため較弱な生育を示した。7月下旬からの多照により穂数・着粒数は増加したが、9月の出穂開花期の異常低温により登熟のおくれがはなはだしく、完熟に至らなかつたものもあり、収量は平年より10%以上減少した。

麦 類

生育初期は全般に低温で日照も少なかつたので生育はおくれ、年内の分けつはほとんどなかつた。その後多照寡雨で1~2月の気温はおおむね平年並となつたため、生育はばん回し3月から4月にかけて、再び低温が続いて分けつ期間が延長し、節間伸長はおさえられたので茎数はその間に大巾に増加したが、生育の進度は平年より大巾におくれて、出穂期では裸麦が5日、小麦が10日近くもおくれたが穂数は多かつた。低温は登熟初期までつづいたので、粒の充実も初め悪かつたが日照が多く雨が少なかつたため、例年多発する雨害および赤かび病の発生がきわめて少なく、稔実がよくて1穂の稔実粒数が多く、その上千粒重も重くて1穂当り収量は平年より1~2割も多く、穂数の増加と相まつて、収量では史上最高の豊作となつた。すなわち作況指数を麦別にみると、小麦125%、裸麦122%、ビール大麦125%、6条大麦118%となつて、昭和38・39年と2年つづきの凶作を一度にふつとばして、九州の麦作も農家から見なおされた。

甘 藷

今年の甘藷は、表にみられるように全国的にまた九

年次	昭36		" 37		" 38		" 39		" 40	
	面積	生産量	面積	生産量	面積	生産量	面積	生産量	面積	生産量
全 国	千ha	万 t	千ha	万 t	千ha	万 t	千ha	万 t	千ha	万 t
	329	633	326	622	316	666	297	588	257	495
九 州	154	303	157	311	157	343	151	306	*135	*260

注：* 印は未確定

州でも大巾に減反した。38年までは全国的には、年々減少していたが、九州は反対に増えていた。しかし九州でも40年に至り大巾に減反した。加えて本年の気象は春季低温が続き、苗の伸長が悪く、また麦、なたねなどの収穫期も遅れたので、甘藷の植付時期が1週間から10日程度遅れた。その後も低温が続いたので初期生育が悪く、とくに8～9月の低温は生育中期における塊根の肥大を著しく遅延させたものと思われる。10

馬 鈴 薯

作 期	年 次 区 分 地 域	昭 36		" 37		" 38		" 39		" 40	
		面 積	生 産 量	面 積	生 産 量	面 積	生 産 量	面 積	生 産 量	面 積	生 産 量
春 作	全 国	千ha	万t	千ha	万t	千ha	万t	千ha	万t	千ha	万t
	九 州	210.2	374.2	207.6	355.7	199.3	325.3	210.0	376.4	202.0	390.1
秋 作	全 国	13.2	19.1	14.9	22.5	14.7	10.9	15.6	20.9	14.0	22.6
	九 州	8.9	10.6	10.1	12.1	10.7	15.5	10.4	14.9	(11.2)	(16.8)
		5.8	6.5	6.5	8.3	6.7	9.5	6.4	9.1	(6.9)	(10.3)

今年の春作馬鈴薯は全国的にまた九州でもやや減反した。しかしながら、北海道方面は気候に恵まれて大豊作となり、九州地区においては植付後の気温低くて萌芽ならびに初期生育は若干おくれたが、5月中旬以降は良好な温度条件に恵まれたため、その後の生育はすすみ、いも収量は平年平作ないしこれをやや上まわるにいたった。

秋作馬鈴薯の栽培面積および生産量は詳かでないが、植付期の気温は例年より低かつたため、萌芽は早く揃いもよく、萌芽後も適温でしかも日照時間多く生育は順調にすすんだ。生育後半の気温は高めに経過して初霜はおそく、秋馬鈴薯栽培には理想的に近い気象条件に恵まれたため、いも収量は平年作を約1割程度上まわつたものと思われる。

大 豆

夏大豆：

播種当時は平年より低温に経過したため、発芽日数は2～3日おくれたが、その後の初期生育は順調であつた。梅雨期を中心に5月下旬～7月中旬にかけて日照が不足し全般に徒長気味に生育し、気温も低めであつたため開花はおくれた。8月6日の台風15号により葉の損傷と倒伏がみられ、その影響は晩生種程大きかつた。百粒重は平年に比べて軽く、屑粒が多く、全般的に平年より3割程度の減収であつた。

秋大豆：

播種より7月中旬までの生育初期は多雨・日照不足のため、徒長し軟弱な生育を示した。しかし梅雨明け以降は多照となり、徐々に生育は回復に向つた。8月

月後半から11月にかけての後期の好天は、澱粉歩留りの向上には好影響をもたらしたと考えられるが、収量を向上させるまでには至らなかつたと思われる。これを要するに40年度の九州の甘藷作は、作付面積の大巾減と生育全期を通じての低温やや寡雨多照の気象条件により、作況は平年作をやや下廻り、生産量は平年の8割程度となつたものと思われる。

6日の台風15号により倒伏が甚かつたが、以後8月は平年より日照が多く、生育は進み、開花は平年よりやや早であつた。9月は平年より低温に経過し、成熟期は早生種では平年並、晩生になるにつれて遅延した。収量については平年並かやや多収であつた。

な た ね

38・39年産が稀有の低収であつたのにひきかえ、40年産のなたねは北九州では平年をやや上廻る反収で、福岡県で135kgを示し、36、37年産に次ぐ多収であつた。南九州では過去の最高に近い豊作で、鹿児島県では157kgと今までの最高記録を示した。これは生育の前半、すなわち開花始め頃まではやや低温であつたため、生育は全般的に遅延し、開花期も平年より遅延したが、開花期以後の気象条件が、多照で降雨が少なく、開花、登熟が順調に行われたためであり、菌核病の発生も収穫期の罹病指数は平年に近い数字であつたが、発病が登熟後期であつたため、稔実にはほとんど影響しなかつたためである。

家 畜

昭和40年は春がおくれたので、放牧開始期等のおくれを見たところもあるが、家畜飼養に大きな影響を与えたものは、主として社会条件であつた。

昭和38年まで増加をつづけていた九州の乳牛飼養家数も、農業事情の変化によつて、飼料生産基盤が弱く、乳牛飼養技術の未熟な農家ででの乳牛飼養が成り立たなくなつて来たため、昭和39年には微減、昭和40年

には前年比93%と激減した。一方、乳牛飼養技術の向上した農家では、飼養規模の拡大が進められたので、乳牛頭数は前年比101%と僅かながら増加した。しかし、乳牛飼養農家1戸当りの平均飼養規模はまだ全国平均に達していない。乳量も飼養頭数増を上廻る増加を見たが、学校給食向けの増等により、乳価も比較的有利に推移した。また、肉牛不足により、雄子牛の生時価格も後半期には高くなつた。

肉用牛は他地域の減少傾向に拘らず、九州では著しい減少が見られなかつたが、引きつづき子牛価格の安値から、繁殖牛飼養農家の減少と子牛の生産減を見るに至り、肥育農家は増したが、昭和40年の飼養頭数は前年比89%となつた。それでも、他の地域の減少が著しかつたために、全国の肉用牛頭数に対する九州の頭数は32.4%となり、九州の比重は大きくなつた。全国的な肉用牛資源の枯渇から、子牛価格は著しく高くなり、従来2倍、3倍という高値を見るに至り、肉牛対策が望まれるに至つた。

牛の疾病としては、全国的に一時炭疽病の発生が問題になつたが、九州では著しい被害は見られず、一部新しく発足した共同放牧場等で管理の未熟から栄養障害とダニ寄生とによる被害を見たところがあつた程度である。

養豚は零細養豚がある程度整理されたことと、価格安定政策がある程度効果をあげて、全国的に比較的順調に推移し、全国平均で前年比126%に対し、九州は123%とほぼ似た傾向を示している。この順調な養豚の動きによつて、繁殖豚飼養が増加し、全国平均で繁殖豚の前年比が129%に対し、九州では133%となつてゐることは、今後の子豚生産の増加ということ予想させる。

養鶏は、全国的に前年後期からの低卵価により、ひなの発生羽数は減少し、1月～6月のひなの発生羽数は全国平均17%の減少を見ている。ただし、外国系ひなの発生は前年の2.7倍に達し、総ひな数の30%を越すに至つた。九州では、佐賀等では、前年よりも僅かながら発生羽数増を見たが、九州全体としては、前年より17%減で全国的動きと全く一致している。このように、ひなの発生が少なくなつたことから、卵価も回復して来たが、後半に至つて、九州にもニューカッスル病の発生を見て、それが各地に拡がりつつあり、このため、卵価はさらに高くなりつつあり、養鶏上の大きな問題となつてゐる。

飼料作物

1月～4月は、幾分低温で降水量が少なくなつたため、南方型牧草の萌芽が約1ヶ月おくれ、北方型牧草の春の生育もおくれた。このため、放牧開始時期や牧草の一番刈りの時期はおくれた。しかし、前年秋まきの飼料用かぶやイタリアンライグラスの生育は、この気候に余り影響されなかつた。

5月上・中旬も比較的好天の日が多かつたので、イタリアンライグラスの乾草調製等は比較的順調に行なわれたが、5月下旬には降水量が多く、トールオートグラス等の乾草仕上げに日数を多く要し、これが、2番草の収量を低下させた。

6月上旬は降水量が少なくなつたので、飼料用実取り大麦の収穫は順調に行なわれたが、6月中旬は降水量が多かつたので、刈り取りのおくれた実取りエンバクの収穫には被害があつた。また、この雨で場所によっては、イネ科牧草にアワヨトウが爆発的に発生した。

7月、8月も平年より幾分か低温であつたために、牧草の夏枯れは平年より軽かつたが、9月、10月の気温がとくに低く、降水量も少なくなつたので、秋の草生回復が弱く、放牧も早めに終牧しなければならなかつた。11月、12月も平年より低温で乾燥したために、秋まき牧草の年内の生育は劣つてゐた。

昭和40年には、場所によつて、台風の影響もかなり受け、4月まきのトウモロコシは8月の台風で著しい害を受け、6月まきのトウモロコシは8月の台風で倒伏はしたが折損はなく、収穫量はほぼ平年に近いものが得られた。

果 樹

落葉果樹

春の低温により全種類を通じて萌芽、続いて開花期が遅れ、したがつて当然収穫期も遅れたが、その後の天候が順調でまた大した台風もなかつたので、収量はよく、とくにカキ、ナシ、クリなどは平年より収量が多かつた。

みかん

これも萌芽開花が遅れ続いて熟期も遅延したが、収量は少なくなつた。しかし発育の盛んな9月、10月の少雨と秋の高温多湿により浮皮現象が多く、甚しく品質を損じた。また熟期遅延のため余儀なく採取期を遅らすことになり、併せて雨天続きで採取上苦勞が多か

つた。

実収高は多少、初めの期待を裏切つたようであり、一部南九州では台風のための風スレなどにより外観を損じたのもあつた。

苗 木

春先の低温により活着が非常に悪くその後の伸長も悪かつた。

そ 菜

全般にそ菜生産は、冬春季の低温や多雨にすぎた梅雨、あるいは記録的な秋冷など、異常天候の影響が著しかつた。

先ず、2、3、4月の低温と乾燥で、南九州の半促成果菜は生育がおくれ、作柄はやや不良であつた。しかし栽培時期のおそい北九州のハウス物は多日照が幸いし順調な生育を示した。

4月から5月にかけての低温は全国的に早熟果菜の生育遅延と減収をもたらした。このために果菜類は高価に終始し、集団産地のハウス物を中心に九州産の関西市場への進出に拍車をかける結果となつた。一方ダイコン・カンランなどの採種栽培は花時の日照に恵まれたために冬季の生育遅延をとりもどしたが、ハクサイなどの葉類は寒波の影響が大きくて減収した。

6、7月の多雨で、スイカ・マクワは不作で、ニンジン・ハウレンソウの採種栽培は低調を極めた。またキュウリ・トマトなどの夏の果菜も日照不足で制約を受け、排水不良地帯では病害に悩まされた。

台風は襲来が早く、また局部的だつたためにそ菜全般に対する実害は少なかつた。一部被覆中ハウスが倒伏して台風襲来期のハウス栽培の警鐘となり、ハウス作付体系に対し大きな教訓を残した。

8、9、10月は適当な降雨と早い秋冷の訪れて、秋冬季の葉・根菜類は病害が少なく、豊作となつた。一時的には安価をみたが、過去の暴落にこり、作付制限もあつたために、まずまずの市況に終始した。

葉根菜類が好調に経過した反面、秋の果菜類はハウス物も含め10月の冷えこみと11月の多雨に災いされてやや不作となつた。また稲の収穫のおくれは、水田裏作のタマネギ・イチゴ、あるいは採種そ菜の作付遅延を予儀なくしたために、これらの作柄が案じられている。

花 き

前半は平年並の順調な生育を示した。

9月上旬の気温低下のため福岡県八女市、糸島郡をはじめ各地の電照キクのうち品種天ヶ原では電照の効果のみられたが、乙女桜は早くから着蕾した。これは低温のため電照効果をあげ得なかつたものと考えられる。その後10月18日の降ひようで、糸島郡下のキク、ストック、キンギョソウなどのビニール被覆連系のはほとんど落葉した。その対策と代作なども行なわれたが、結果においては被害株をそのまま管理したものが多少花期の遅れがあつたが生育を回復し成績がよかつた。

茶

一 番 茶

南九州は一番茶前の低温と雨量不足のため茶芽の伸育が悪く、摘採期は10~20日おくれた。北九州は4月22日の霜害と長期間の低温つづきが原因となつて、伸育悪く24~25日もおそかつた。収量は局部的に増収したところもあつたが、一般的には10~20%の減収を示した。

二 番 茶

一番茶期の摘採遅延と、その後の気温低下および日照不足のため、発芽伸育は不そろいとなり、10~20日おくれた。しかし一番茶の価格好調により農家の意欲が高まり、肥培管理も十分行なわれたので、一部を除き増収となつた。

三 番 茶

7月中・下旬から8月にかけて各地とも降水量少なく干ばつぎみとなり、芽の伸びは不良で、摘採期は10~20日おくれ、全体的に減収であつた。

九州における著名茶産地の摘採期および10a当たり収量を示すと、次のとおりである。

地 名	一 番 期		二 番 茶		三 番 茶		
	摘採期	収量 kg	摘採期	収量 kg	摘採期	収量 kg	
枕崎	{昭40	4.30	301.8	6.15	226.5	7.26	293.0
	{昭39	4.18	450.4	5.31	194.4	7.16	274.4
知覧	{昭40	5.7	345.5	6.30	363.7	8.11	195.4
	{昭39	4.24	338.4	6.17	454.4	7.28	369.1
川南	{昭40	5.19	612.0	6.28	464.7	7.31	352.0
	{昭39	5.1	393.0	6.16	464.0	7.21	271.0
熊本	{昭40	5.18	643.2	7.6	523.8	8.12	396.0
	{昭39	4.24	452.6	6.16	343.0	7.28	356.0
嬉野	{昭40	5.21	490.0	7.7	463.5	8.20	444.4
	{昭39	4.27	486.6	6.29	431.2	8.7	505.6
八女	{昭40	5.21	394.6	7.5	346.2	8.11	381.0
	{昭39	4.26	339.0	6.15	285.0	7.23	430.0

注：枕崎の調査茶園は昭40と昭39が同じでない。